



俄羅斯紀聞二集  
八

屬附學大田稻早  
館書圖

寄第 川田氏寄託

654

第 205

第 18

出帶許不外館

ル8  
2994  
18



俄羅斯紀聞二集

第八冊

蝦夷拾遺

北裔備攷

松前志

西洋錢譜

漢詠餘話附

下

門 87  
號 3038  
卷 18

特  
門 8  
2994  
18

國書

蝦夷拾遺 本多利明

船表土地開墾成就一は良國可成事  
於て庶人のおとく船表の土地は空露海  
漁地おまは住之別きる日本の人お中  
に住居成り起る土地ありと假令押し  
下るよま五穀を生しこれ食物をしく因て忽ち  
飢乏然人味文は漁氣は諸疾病成るし庶  
人多るし此は昔より日本の農民は  
海へし耕作成る種より古き植は附

しり試したる事ありしは、彼を脱りし何し  
無く依りて今も有りて、軍を及せしる所し又  
彼出陣の廣大なる事、然し庶人のある所あり  
とて、彼を脱りしは、是より、空を脱りし  
との成らん、危うも、毎年の事、以て、いふ所  
する事、勤者く、地を、附り、有る中、に、最盛なりし  
く、秋の事、以て、いふ、晴天、以て、事、以て、有る所  
と、依り、事、中、に、風、以て、いふ、事、以て、有る所  
は、日、初、の、庶、人、と、いふ、怖、せ、里、利、明、情、を、以て、有る所  
最、に、理、以て、成る事、以て、いふ、有る中、に、最盛なりし  
秋、の、不、幸、の、事、以て、有る所、た、之、事、以て、有る所、と、いふ  
元、は、日、初、の、種、以て、有る所、明、君、が、いふ、事、以て、有る所  
城、以て、有る所、梅、以て、有る所、お、道、守、が、いふ、事、以て、有る所、困、窮、の  
世、以て、有る所、と、有る所、と、有る所、お、道、守、が、いふ、事、以て、有る所、  
野、以て、有る所、と、有る所、と、有る所、お、道、守、が、いふ、事、以て、有る所、  
成、る、事、以て、有る所、と、有る所、と、有る所、お、道、守、が、いふ、事、以て、有る所、  
お、道、守、が、いふ、事、以て、有る所、と、有る所、と、有る所、お、道、守、が、いふ、事、以て、有る所、  
我、朝、の、上、古、の、風、俗、以て、有る所、と、有る所、と、有る所、お、道、守、が、いふ、事、以て、有る所、

風俗を安んずるに由りて(あり)利明北年の以  
然谷の郡也實其古郷を尋し其百姓の老若  
わして武州思玉郡の内子然谷村にあり  
珠子村抄に關東より奥州より關國の  
劍鋒ありて其状を以て人等を取らざる家  
の徳を以てしつるを以てしつる頼朝卿  
の治るに由りて關東より奥州へ其の  
進化を尋し其郷或は名家に任ぜられたる  
其法今も教千の古郷を連まて彼村近

其の日向を講し山陰に歴然あり其近郷  
皆あり其古郷城垣の剝りたるに城の遺  
の四方に石を以て垣を築し柱桁棟梁  
木の物を多く其古郷を以て信長の大井城一  
枚石の古郷を以てしつるを以てしつる物とし  
人外に是を視るに其形も圓堆の如し其家  
其家根石は其古郷を以てしつる幅八九尺許り  
一文餘厚五六七寸許りあり其石の性も  
密又堅あり石垣の古郷を以てしつる石の制物

作

ハ善し皆自然石なりて生地の供の石段ハ造  
必也物あり是れ城根ハ我朝上古の風俗  
を考へ知る言中あり是を里人ト尋ふと云  
を村皆為ありと云り又家根石のおお紋向ハ  
里人の吾ト曰く近村を山ト云石のおの物出  
なく言ふを方より持ち運ひてくる物ありし  
こと今今ハ此石を耕化場道の橋を掛くる  
物彼村近つと云り別ハあり其外ハ堅結城と云  
名州田奥州白川田在ハ多く古塚あり古岩

家何り今ト云りハ歴代ト云  
相又能事地ハ毎年秋の末より漸と大雪  
ハ晴是大字ト上界ト云ハ冬冬ハ大雪ハ  
煙の光輝ハ地面トあり自然地字ハ我朝  
風ハ何りト冬中ト云ハ晴天ト云ハ日ハ  
幸我朝の天氣ト異ト云ハ又冬中の事  
休ハ中華地ト云ト云ハ北京順天府ハ  
ハ極地ト云ト度七十ト云ハ中華友  
難而程ト云ト沙里南ト云ト度の中ハハ氣









と昇〜〜海をよき語をよき〜海に雷電  
り〜時雨驟雨電雨降り〜〜きき智と知友  
〜〜晴と曇り〜〜海の時待と  
時待た〜〜と列〜〜海の時待と  
風去雷電も待と〜〜海の時待と  
名目行〜海の時待と〜海の時待と  
〜時待と〜海の時待と〜海の時待と  
風〜〜雷電〜〜海の時待と  
〜〜海の時待と〜海の時待と

江戸の流水成程と山岳の溪谷成程とあ井  
成程〜海の時待と〜海の時待と  
量〜〜田畑成程と〜〜海の時待と  
農事〜〜海の時待と〜海の時待と  
情〜〜海の時待と〜海の時待と  
照〜〜海の時待と〜海の時待と  
洞〜〜海の時待と〜海の時待と  
海の時待と〜海の時待と〜海の時待と  
海の時待と〜海の時待と〜海の時待と









只心丹海所の主人海海〜交易成るも〜  
いて法に類のもの成るも〜交易成るも〜  
以て心丹海所の主人海海〜交易成るも〜  
何れも其の旨深し海所の主人海海〜交易成るも〜  
成程〜色〜官のと先〜其の油は〜  
様々〜色〜官のと先〜其の油は〜  
成程〜色〜官のと先〜其の油は〜  
の主人海海〜交易成るも〜  
た〜色〜官のと先〜其の油は〜  
唐者も西の海所も〜交易成るも〜  
日本の海所も〜交易成るも〜  
〜色〜官のと先〜其の油は〜  
法に類のもの成るも〜交易成るも〜  
お祈を為すは唐者も西の海所も〜  
日本の海所も〜交易成るも〜  
此の法に類のもの成るも〜交易成るも〜  
其の油は〜色〜官のと先〜  
勿論〜色〜官のと先〜其の油は〜













次の合意の代金ありて我

網の務人常事と其邦の人と事ありたり

云此邦合意の代金ありて其邦の人もあり

又其邦の代金ありて其邦の人もあり

其代金早きなりと事ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり

其代金の代金ありて其邦の人もあり



國をよこし百葉百穀豊饒し  
時行くくを能く決く定夜永経の物よ  
中七もいふ今一依くく人向望返わ  
く経歴くく情弱少流もは法華法枝  
愚者人多くくしくく萬邦よ今一國  
用少年一修らるる若財よ平切るる人

物にいひて我

朝もま國の色は海は堪ひし



奥羽南部佐井の山麓のまき竹園佳佳  
とていふ所の所好の思ふまゝに  
享元子年十一年の冬、夢田のまき竹園の  
後船より、積り念せし帆を、  
ひカムサスカ、お原を、  
此のまき竹園、  
のまき竹園、  
まき竹園、  
まき竹園、

奥羽南部佐井の山麓のまき竹園佳佳



のそのまゝ 長ね日本宮古のまゝしせゆ同  
不田河のらふして伊東お少ぢ人あまらう  
天めあ年の夏ウルツポエトロツプクナシウの落  
のま人風況きうらうらまぬまの田播まの  
ハムスツバのほらうらうて流流ニ百枚の家孫  
残流く 奥戸利ハはカムサスカの魚刺ビヨトロ  
妹奪くうらうらうまのまらうらうらま  
の持ち残流くくけきまゆ津まういり  
おの國字いらはは練くくくまのまを記

人田河信人情くくくも男を記まうらういり  
まの六四年の友ねおの西南の大洋へ英國大  
船一發行かうらうら流くくくく流流流二  
序は舞と遠流く流流くくくくくくくく  
二年あふ十八名名の継流くくくくくく  
人もまゆくくくくくくくくくくくく  
宿うらうら流流くくくくくくくくくく  
洋西ハ朝智國山丹國 西の法 小は度ま  
及移り所まあしまあを我





唐の劉氏運送（一） 魏氏保（二） 魏氏保（三）  
水久（四） 魏氏保（五） 魏氏保（六） 魏氏保（七）  
五月付に運送の古業沙の（八） 古業沙の（九）  
古業沙の（十） 古業沙の（十一） 古業沙の（十二）  
古業沙の（十三） 古業沙の（十四） 古業沙の（十五）  
古業沙の（十六） 古業沙の（十七） 古業沙の（十八）  
古業沙の（十九） 古業沙の（二十） 古業沙の（二十一）  
古業沙の（二十二） 古業沙の（二十三） 古業沙の（二十四）  
古業沙の（二十五） 古業沙の（二十六） 古業沙の（二十七）  
古業沙の（二十八） 古業沙の（二十九） 古業沙の（三十）

魏氏保（一） 魏氏保（二） 魏氏保（三）  
魏氏保（四） 魏氏保（五） 魏氏保（六）  
魏氏保（七） 魏氏保（八） 魏氏保（九）  
魏氏保（十） 魏氏保（十一） 魏氏保（十二）  
魏氏保（十三） 魏氏保（十四） 魏氏保（十五）  
魏氏保（十六） 魏氏保（十七） 魏氏保（十八）  
魏氏保（十九） 魏氏保（二十） 魏氏保（二十一）  
魏氏保（二十二） 魏氏保（二十三） 魏氏保（二十四）  
魏氏保（二十五） 魏氏保（二十六） 魏氏保（二十七）  
魏氏保（二十八） 魏氏保（二十九） 魏氏保（三十）

魏氏保（一） 魏氏保（二） 魏氏保（三）  
魏氏保（四） 魏氏保（五） 魏氏保（六）  
魏氏保（七） 魏氏保（八） 魏氏保（九）  
魏氏保（十） 魏氏保（十一） 魏氏保（十二）  
魏氏保（十三） 魏氏保（十四） 魏氏保（十五）  
魏氏保（十六） 魏氏保（十七） 魏氏保（十八）  
魏氏保（十九） 魏氏保（二十） 魏氏保（二十一）  
魏氏保（二十二） 魏氏保（二十三） 魏氏保（二十四）  
魏氏保（二十五） 魏氏保（二十六） 魏氏保（二十七）  
魏氏保（二十八） 魏氏保（二十九） 魏氏保（三十）

魏氏保（一） 魏氏保（二） 魏氏保（三）  
魏氏保（四） 魏氏保（五） 魏氏保（六）  
魏氏保（七） 魏氏保（八） 魏氏保（九）  
魏氏保（十） 魏氏保（十一） 魏氏保（十二）  
魏氏保（十三） 魏氏保（十四） 魏氏保（十五）  
魏氏保（十六） 魏氏保（十七） 魏氏保（十八）  
魏氏保（十九） 魏氏保（二十） 魏氏保（二十一）  
魏氏保（二十二） 魏氏保（二十三） 魏氏保（二十四）  
魏氏保（二十五） 魏氏保（二十六） 魏氏保（二十七）  
魏氏保（二十八） 魏氏保（二十九） 魏氏保（三十）

余著所の小冊子行  
名著と道徳起原論と

是本の改稿  
と洋小稿と

北裔備攷 山田聯著

赤夷考

按通典東夷九種一曰赤夷北史高車蓋古赤  
 狄之遺種也北方以為勒勒諸夏以為高車丁  
 零其語略與匈奴同而時有小異ト赤狄ノ稱  
 其來ル尚シ矣然メ今蝦夷ノ俗稱<sup>ノ</sup>「アカヒト」ト  
 言モノアリ夷語「ア」レシヤト「ヒ」ト「赤」ト即赤人ノ義  
 ナリ松前邊ノ人呼テ赤夷<sup>アカヒ</sup>ト云蓋古ノ赤夷ナリ  
 然レ氏己姑ク我俗ノ稱スルトコロニメタリノ本國ノ人

ニツカラ 稱呼スルトコロニ「アラス益ツノ赤髮服用  
亦多ク赤ヲ用テスガ故ニコレヲ「アールシムト」稱シ  
又赤人赤狄等ノ號アルトコロナリソノ來ルニナ「左  
パカ」諸島ヨリスコレソノ東北北極出地五十一度福  
島初度經一百七十五度ニアタリテ一國アリ  
蝦夷稱メ「カムサフカ」ト言西國「加模斯加杜葛」  
ノ地是ナリ「ア」地本ハ蝦夷同種ノ人類ニシテ「ナ  
ル」ニ「蝦夷」ノ地ナリ近年一種之胡人來リ侵ス  
アリ終ニ地ヲ畧シテコレヲ併有ス虎俗赤人ト稱スル

即是ナリ今ハソノ地ツ井ニ赤人ノ巢穴トナツテソノ  
國東南ノ要區ナリトイフ「加模斯加杜葛」ハ固  
ヨリ亞細亞韃而韃一部落ノ地ナリ古夜叉國  
又大室幸等ノ地恐クハ是ナルベシ

按唐書流鬼傳北有夜叉國人皆豕牙翹出  
敢人等ノ文アリ「ニ」等ノ風俗今「ナ」カ  
斯加杜葛ノ諸島ニ殘レル由ナリ「サ」ハ所謂夜  
叉國ニノ邊ナルカ

今止白里也益古ノ大室幸ノ地ナリ止白里也

清一統志云西畢爾斯科海國聞見錄云細亞里也  
八紘譯史云昔白利牙二作儿哈是ナリ所謂赤人  
即鄂羅斯國人ナリ鄂羅斯清一統志又倭洛斯三朝  
實又羅刹清一統志又羅又車隆又老槍述本又阿  
路索八紘譯史又邏車紀略等二作ル古ノ堅昆丁  
令監亭斯骨利幹過羅支阿羅志等ノ地之ナ是  
ナリ我ニ在テエシラ魯西亞ト稱シ又莫斯科未亞  
ト稱ス魯西亞イニタ何ノ義ナルコトヲシラス莫斯科  
哥未亞トハ蓋ソノ國都ニ因テ總國ニ名スルナリ

蝦夷稱ノ赤人トシ又「ヌチヤクル」ト言フ之ヲ魯西亞  
國人ヲ稱メ所謂鄂羅斯國即是ナリ余嘗テ鄂  
羅斯考ヲ編テ北邊輿地ノ考索ニ便ス北邊今改  
是今ソノ輿地四鄰ノ説及止白里也部加模  
西加杜葛等ノ説ヲ取テ蝦夷東北輿地相接  
云ノ梗槩ヲ著述ス左ノ如シ  
又按魯西亞國志云魯西亞ハ口シ区ノ開キ之國ナ  
ハソノ祖王ノ名ヲ以テ國名トシテ魯西亞トハ  
イフナリ魯西亞國開闢以來漸ク張大ニナリ

赤白黒ノ服色ヲ以テテノ國人ヲ三部ニ分テユラ  
三州トスツノ一ヲコロステロスタントイフ即赤色ノ  
義ナリ莫斯科未垂ノ名何ノ義ナルコトヲ詳ニセス  
コトノ都城ヲ以テソノ國ヲ總稱スルナルベシ今三  
州ヲ合テ單ニ魯西亜ト稱スルハ年曆一千七百二  
十一年<sup>享保二</sup>ニ始ル帝號ヲ稱セシ伯多珠ト言ハ  
王ヨリナリトコシハセオカラビト魯西亜國部所見  
スル所ニ因テ譯述スルナリサレハ魯西亜ヲ稱スル  
ニ赤夷ヲ以テスル固ヨリ偶然ニ出テホリノ證據

アルモノトセン歎

鄂羅斯在喀爾喀楚庫河以北東南至格爾必齊  
河北岸自大興安嶺之陰以東至海與黑龍江所  
轄北境接界西接西洋西南至土爾古特國及準  
噶爾界北至海去中國二萬餘里<sup>清一  
統志</sup>

按清人ノ地志ニ鄂羅斯國ノ境界及ヒソノ形  
勢ヲシルス多ハ未タ詳ナラズ蓋ソノ輿地曠遠清  
人イタタ究メ得ズ且ソノ使人所說多クハ矜夸ニ屬  
スヲ以テ僅ニ見聞ノ及フ處ニ限レルヲ以テノ故ナル



ナレシ因テ今ソノ接境ノ畧ヲユニ奉リ

魯西亞國西ハ雪際亞國スウエツシヤ波羅尼亞國バロニヤニ接シ南ハ

韃靼國南幹牙國北高海自立韃靼支那韃靼

及ヒ我蝦夷諸島ニ接シ北ハ氷海ニ至リ東ハ亞細

亞盡境東海ニ至テ北亞墨利加ト境ヲ接ス又按近

墨利加ノ北境ラ併有スト云ソノ輿地幅員東西窄長ニテ南北狹

隘タリト云フ魯西亞本ハ歐羅洲中ノ一國ナリ然

レ今ハ亞細亞洲韃靼而韃ノナカバラ兼併セリソノ説

左ノ如シ

韃靼而韃ハ亞細亞洲ノ北邊ニ在リソノ地極テ大ニ

メ殆ント本洲ノ半ニ居ルソノ疆界北ハ氷海ニ臨ミ

東ハ東方ノ大洋ニ至リ南ハ支那印度百兒西

亞等ニ界、西ハ歐羅巴魯西亞ニ接ス部内ノ河水

ソノ最大ナルモノ四ツ阿比河清一紋志野布厄臚設河ニ作ル是也

河歴那河ノ三ハ哈北流シ亞莫兒河ハ西ヨリメ東ニ

流コレ漢ニ所謂コノ地分テ三大部トス東ニ在ル者

ヲ支那韃靼ト云フコレ支那帝ニ属セル者ニテ其中

ノ諸部最著シキ者ハ「モンセウス」滿「モゴレン」蒙等ナリ

南ニアルモノヲ自立韃靼ト云コレ皆多クノ自立ノ君長  
アリテコレヲ分治ス此部北高海ヲ以テハカテ東西二  
部トスソノ東部諸國ノ中最著シキ者ハ低別突  
又名曰拔多ト云フコレ則支那所謂哈密也又單役得加  
魯書火州赤斤蒙古于闐等ノ諸地ナリ  
斯加爾中ヨリ清朝ニ屬ス加爾模幾コノ地諸國ニ  
無ニ鳥斯別祈一名沙加待ノ都等ノ五部ナリ  
又其西部諸國ノ中最著シキ者ハ西尔葛カシヤ西亞カシヤ大  
半西細亞ニ係リ又少ク歐羅巴ニ達傑斯富亦莫斯科  
係今皆莫斯科未亞ニ屬ス等ノ二部ナリ北ニ在ル者ヲ魯西亞韃靼トイフ

コレ莫斯科未亞ニ屬スル者ニメ中ニ三處ノ大都  
督ヲオク其一ヲ止白里亞ト云東西二部ヲ分テ  
リコノ地極テ大ニメ遠ク東方ノ大洋ニ至ル蝦夷  
ノ東北加模撒斯加國モ亦此部内ニ屬スソノ都督  
所鎮ノ府城ハ西部ノ中ニ在テ多模爾斯草ト云  
説少記畧作脱博斯奇城其二ヲ加山トイフ其府城亦コレ昔ハ自  
立ノ王國ニメ名譽ノ地ナリシガ千五百五十三  
年日本天文二十一年莫斯科未亞ニ併セラル其三ヲ  
亞私太蟻甘ト云フ其都城亦曰亞私太蟻甘  
漢譯又作亞斯德諫罕本古ハ

自立ノ王國ナリシカ千五百五十四年莫斯科未

亞ニ併セラル坤輿約說山村昌永譯スルモノ  
ヲ録シテコレニ收載ス

莫斯科未亞東西徑一萬五千里南北徑八千里中

分十六道國內兵力甚強日事吞併外職方紀

俄羅斯古大食國歷今一千七百一十餘年其王

都曰脫博斯奇城近邊曰伏樸處城色楞額城尼

爾苦斯城尼爾苦斯有總管駐守入通市者皆泥

樸處人別其種曰羅利設老鎗又老羗龍少紀畧

其國王察漢汗所居之城曰莫斯科窪近西北大

海去京師甚遠相傳其國本微弱地亦狹後假兵力

於西費耶斯科國漸疆盛稱汗者歷二十三代三百

五餘年吞併喀山托波兒諸處亦一百六十餘年

今其地廣袤幾二萬餘里分八道窪一道曰莫斯科

都一西卑爾斯科其六道喀山托波兒佛羅尼使斯科

多計由斯科司馬連斯科三皮提里普爾斯科小斯科

無設官管轄南界土爾古特哈拉谷兒以哈薩克

諸國及內附之喀爾喀西北尚有十餘國大者曰

西費耶斯科國里耶斯科近為所侵掠皆微弱云

按之鄂羅斯國輿地總界ノ説ニ係テシル所ノ  
東界阿比河ニ至テ十六道ヲハカツト云ヒ東ハ海ニ至  
ト言テ八道ヲハカツト言フ然レモ今魯西亜國全地  
ノ圖ヲ攷求スルニ部落ノ省會ノ如キモノ大抵四十  
道アリ因テ「セオガラヒー」所見ノ譯書ヲ併セ攷ル  
所左ノ如シ魯西亜ノ併有スル所歐羅巴亞細亞ノ二  
大洲ニワタル今分テ五部トス第一「インゲン」上禮  
勿泥亜」曰雪際亜ノ地也今魯西亜ニ併セラル第二

「西魯西亜」即本國西方一部分ノ總稱ナリ第三「東  
魯西亜」即本國ノ東ノ方一部分ノ總稱ナリ第四  
「魯西亜蠟皮亜」第五「魯西亜韃靼」右五部ノ内  
縣府ヲ建酒長ヲ置處十二處一「諾勿瓦的亜」二  
「アルカンドル」三「莫斯科島」四「ニスノウゴロト」五「スモ  
レンスコ」六「キウウウ」七「イロゴロト」八「ウコロ子ス並アノ  
九「アスタラカ」十「オレンブル」十一「加山」十二「白  
里」魯西亜國志桂川氏「モラカラヒー」ヲ譯スル  
ノ書ナリ下段志ト稱スル皆是ナリ  
魯西  
亞國地圖「モスコ」即莫斯科產莫斯哥亞ニシテ  
亦是ナリ

志第三「トボルスク」即托波兒ニシテ又西畢爾斯料

トイフ西畢爾又止白里也ニ作ル托波兒亦作狄穆

ハ止白里也ノ鎮城ナルヲ以テナリ志第十二「カザン」即

喀山亦作加山志第一「ウラロ子ナ」即佛羅尼使

是ナリ志第十一「キエウ」即計由「スモレンスク」即司

馬連斯料志第五「ヘテルブルク」即三皮提里普爾

斯料志三「ヘテルスベク」ハ「インゲル」ニシラドノ大「カルタ」即

郭羅多阿木哈斯料志所見以上清志ニ所謂

八道ナリ「ベル」即黑林諾付「シ」ヒゲスク」即西

穆必爾「サラトウ」即薩拉諾付「ウハ」ウマヤセ「アスタ

ラヤン」志第九「ユストロ」「シ」ウウウテ「タ」ボウ「リヤ

ザン」ウラジミル「ヤロスラウ」ウラロゲク「ウヴェル」ウラ

「クレウ」クルスク「ハルユウ」ウウロス「シ」スク「ツユル

ニエウ」カメ子イ「ボドルスコイ」「シ」ト「シ」「ミン」スク「ウ

イルナ」ウイテ「スク」ヒスコウ「ウ」ウゴロデ「ミ」タウ「リガ

ウ」エウ「ウ」イ「ホルチ」アル「ン」ケルスカヤ」等ノ三十

二道アリ統志ニ西費耶斯料圖里耶斯料志ニ

第一諾勿瓦的亞ニ「アルカシ」四「ニス」ウゴロド」

七「ヒイロゴロト」十「オレニフルグ」等ハイニメタノ何レノ  
地ナラフヲ曉知ヤズトイヘルコトニ歴纂スルトコロヲ八  
道ニ合スレハソノ地廣袤若干里分四十道ト記シ  
テ可ナリ今統志收載スル所ノ山川及ヒソノ邑名ハ  
色楞格河及ヒニル苦斯城ノ邊ヨリ西北黑林  
諾付西穆必爾斯科地方所在スルハコロメニ纒  
ニ清國ト境界ヲ接スルノ輿地ノ記セルナリサレバ  
魯西亜國地ニハカノ一ニオレ所ヲ録出スルノニ又ソノ  
土産ノ部ニ麻門蒙薩華言鼠也產於極東北

ノ地トスレハソノ書曰「カムサスカ」ヲホーツカ」邊ノ地理ヲ  
述ビ及ビアル「ヤシルベン」ニ魯西亜國全地ノ畧説ナ  
リ  
又按莫斯科窪ハ魯西亜ノ旧都ニメタノ國年歴一  
千二百年日本正徳二年ノ頃ヨリ魯西亜國王ヨニ  
居城セリ後一千七百三年寶永元年伯多琛  
帝始テ都ヲ「ベテルブルグ」ニ作テ居ラコトニ遷ス後  
又十八年一千七百二十一年日本享保六年清康熙六十年十一年始テ帝號ヲ  
稱セリ今ニ至テ「オオコ」ニ都ス統志所記ハ

蓋康熙四十年前ノ録ナリ雍正乾隆間事録出ス  
ルキヲ以テミルベシ故ニ旧ニヨリテ莫斯科産ヲ以テ  
ソノ王都トスルモノナリ脱博斯奇城ハ止白里也  
管轄スノ府城タルヲ懸聞シテ王都ト云フナルベシ  
己誤レルノ甚ナリ

又按國志云魯西亜ノ君長往古ハ「ホルス」  
ナリ中頃「ゴロ」トホルスト「大將」トナルソノ後「カサール」  
トナリ  
一書ニ一千五百十四年日本永正伯多珠帝  
十一年王号ヲ称スト是カ  
ニ至テ始テ帝号ヲ称ス實ニ一千七百二十一年

六年ノ事ナリト又莫斯科島ノ地ハ一千二百年  
年ノ比ヨリ魯西亜國王ノ治城タリ一千五百五十  
年天文十トホルスクヲ領シ後二年天文二「カザン」  
後服スト按ニ正治二年ヨリ天文二十一年ニ至ルニ  
百五十二年タリ統志ニ称フ者歴二十三代三百五十  
餘年ト是ナリ天文二十一年ヨリ正徳元年康熙五  
ニ至ル一千六十年タリ統志ニ谷併喀山托波兒  
諸處亦一百六十餘年ト是ナリコレ以テ統志所  
見康熙中ノ録ニ係ルヲ觀ルニ是ル又一書一千六百

四十四年 寬永十三年 イルクツコイ」ヲ後服ス一千

六百八十九年 元祿二年 「子ルトシキンスコイ」ノ内

「子ルトシキン」城ヲ築テ唐山ノ境ヲ固ス一千七百十

三年 正徳四年 「カムサスカ」ヲ後服ス一千七百二十

四年 享保八年 「セレンスコイ」ニ城ヲ築テ唐山ノ

境ヲ固ストモシ」ノ併有年歴ノ略ナリ「イルクツコイ」

統志厄尔庫城「子ルトシキン」又「子ルトシキン」又「子ルトシ

ンスコイ」即紀畧「尼爾若斯城」セレンスコイ」即「セレン

カスコイ」又「セリンキンスキ」即色楞額城是ナリ

止白里也 一道自托波兒河東至尼布楚與中

國分界處曰西畢尔斯科 清一統志

自俄羅斯而東至細密里也皆為北海 海國聞見錄

烏龍江之西北有阿路索屬國名昔白利牙其國

有罪者於放此歲久成一大國有城池今聞已有

王矣 八紘譯史

按清人止白里也ノ地ヲ志スモノ多クハイ

マタソノ詳密ニイタラス乾隆以後ノ錄コ

レヲ詳ニスル處アルヘシ亦大清一統志續



修五百卷ノモノ舶來ノ日ヲ竝ツノミ  
昔ハ止白里今亞細亞ノ北陸大韃靼大羊ノノ  
地ヲ曠漠韃靼ト稱シテ本國ヨリサノミ心ヲ  
寄ス近隣ノ強盛ナル國々ニ服從シテ居タリ  
シナリ伯多瑛帝ノ時ニ至テ阿比河ヨリ以東  
大韃靼ノ東北ノ盡境大東洋ニ至ルマテ悉ク  
併吞ス

按コレ「カムサス」カ邊ヲモ併吞從服セシ  
ヲ言ナリ上ニ所見スル所併セ致ヘシ

ソノ初百餘年前「ト」王ノ頃ヨリ西止白  
里ノ地ハ既ニ本國ニ服從セシナリヨリ  
絶ス東ノ方ヲ侵掠シテヤマス但東南門瓦爾  
即蒙ノ地ハ既ニ支那ニ服屬スルニヨツテ子  
六百八十九年元祿二十八年ソノ壕ニ城ヲ築テ  
固トシ  
按コレ則「子」ルトシ「キ」ニル苦斯城ヲ言ナリ  
ソノ他ノ地ハ悉ク伯多瑛帝ノ城本國ニ從ヒ  
シナリ又一千七百二十五年享保三十年清  
船師

加比丹ベリシクス。ハーゼルク。ツキリコウ  
三人ニ命ノコノ地ノ圖志ヲ作ラシム伯瑒帝  
崩ノ後一千七百三十年享保十五年女帝「ア」ナ  
ノ時ニ至テソノ初テ成リ夫ヨリ以來地理ノ  
曲折モ明白ニナリテ多ク國土ヲ開キ支那「カ  
ムシカツト」等ヘノ往來ノ路程モ詳審ヲ得テ  
行路安穩ニ成タルナリ  
按コ、ニ言フトコロ止白里也地圖ハ舊刻  
魯西亜總圖中收載スルトコロニシテ今魯

西亜國地圖ト稱スル享和年中魯西亜國使  
節「レ」サノツト等々齋ニ到レル所ノモノニハ  
アラスコノ圖ハ「ベ」テルゴロオテ「帝」ノ時イ  
マタ「ア」メリカノ邊ニ至ラス稍ク「カ」ムサス  
カ邊ヲ開キ得タル時ノ圖ナルカ故ニ東北  
邊地トモニ今ノ圖ノ如ク詳審ナラス原圖  
ハ魯西亜語ナルヲ拂郎察語ニテ譯シ和蘭  
ニテ刊行セル者ナリ此山村昌永「カ」説  
此國ノ大會長ハ「ト」ボルス「キ」ノ府地ニオル其

次ナルモノヲ「エニセイスコイトイルクツキ」トニ置ヨツテ分テ三州トス「トボルスキ」トニ置キ各州又數道ヲ分テ縣ヲ立且夫々ノ酋長ヲ置テ理メシムソノ各道ノ地ハ著キモノ而己ヲ下ニ載ス「カムシカツトカ」亦ソノ中ノ一國ナリ

按「トホルス」即脱博斯奇城又托波兒ニ作リ又狄穆演斯科ニ作ル「エニセイスコイ」疑即伊夏謝栢奧ニシテ「イルクツキ」即厄爾庫

城ナルヘシ以上三州ヲ止白里也ノ鎮城トシテ「カムサス」カ「ラホツカ」ヤ「コー」ワカ等ノ地ハ「ミ」ナ「厄爾庫城」ニ隸ストイフ以上止白里也ノ畧説ナリ  
又按止白里也名稱ノ義未詳疑ハ古所謂大室韋ノ地是ナルヘシ北史ニ南蠻<sup>室</sup>韋北行十一日至北室韋又千里至鉢室韋又西北數千里至大室韋ト唐書ニ室韋蓋丁令苗裔也地北瀕海ト又五代史胡嶠陷虜記黑車子牛蹄

突厥鞭却子狗國等ノ説ヲ記シ唐書流鬼國  
北一月行至夜叉國其國人豕身翹出噉人莫  
有涉其界者未嘗通聘ト胡嶠記亦曰契丹嘗  
遣人齎乾鈔北行究其所見其人自黑車子歷  
牛蹄國以北行一年經四十三城居人多以木  
皮爲屋其語言無譯者不知其國地山川部族  
名號其地氣平地則溫和山林則寒冽自此以  
北龍蛇猛獸魑魅羣行不可往矣其人乃還此  
北荒之極也ト蓋皆止白里也ノ地ヲ言ヘル

モノナルヘシ然レモ古今沿革ステニ一十  
ラスレテ夷言譯字清濁輕重ノ差異アル今  
ニ在テ率<sup>率</sup>合説ヲナスヘカラサルモノアリ  
タ、舊志所見事ノ俄羅斯封内ニ係クヘキ  
モノ抄メコレヲソノ故中ニ收載スレハコ  
ユニ區々ノ説ヲナサス  
加模西葛杜加ハモト此地ノ所屬ナリシカ今  
ハラコツコイノ酋長ニ隸スソノ地ニ大河アリ  
リカムシカツトカト云北極五十六度三十分ノ

地ヨリ流テ大東洋へ注ク故ニソノ地ニ名ケタルナリ

按加摸西葛杜加蝦夷コレヲカムサツケト言  
カム夷語魚ナリサツケ乾ナリコレ蝦夷等カ  
カシコニ行テ魚ヲ捕リ乾シテ持歸リシニ  
ヨリテ名ケタルナリトイフ加摸西葛杜加  
イマタソノ何ノ義ナルヲ知ラス如クハ  
ソノ大河ノ邊ニ在リテ乾魚セシヨリコレ  
ヲ河ニ名シテツイニ一部ノ名稱タルモノカ

蝦夷ノ種類グルムセナルモノ今ナオソノ

地ニ在テソノ境界亦モトヨリ蝦夷ノ部屬  
ノ由ニ言傳ヘタリトイフ故ニ本文亦云々  
ノ説アルカ

北ハ止白里ニ境ヲ接ス又五十九度三十分ノ  
地ニ<sup>カ</sup>フスタヤト云河アリ西ニ流テベンシ  
スカヤノ海灣ニ注ク此所ノ横徑甚狭シ晴夕  
ル日ニハソノ中地ニアル山ヲ東ノ海濱ヨリ  
モ西ノ海濱ヨリモミルト云南北ノワタリニ

百四十里ノ南末銃ノ所クリルスカヤロハ  
子カト云北極五十一度三分ノ地ナリ伯多  
帝ノ建ラレシペテルスブルクノ都ヨリハ百  
二十七度東ニ當ル此地ハ山甚多シ中分ノ地  
ハ一帯連綿トシテミナナリシカモ石山ニ  
テ不毛ノ地ナリ中ニ三ツノ火山アリ昔ヨリ  
常ニ烟ヲ吐又時ニ焰ヲ出ス灰ヲ飛ス一ツヲ  
アハシンスカヤト云一ツヲ左ルバシンスカ  
ヤト云一ツヲカムシカツトカト云此山甚高シ

晴ル日ニハ六十里ノ外ニ見ユル山脚メク  
十萬五十丈八十間一年ニ兩三度灰ヲ噴出ス  
一ツノ時ニヨツテ多少アリ多キ時ハ八十四  
方ニ灰ヲフテシ深サニ尺餘ニ至ル千七百三  
十年元々ニ大ニ焼出テ石及ヒ種ヒノ色ナル  
硝石ヲ燒化セシモノナリ噴出セシ一ツアリ又  
溫泉極テ多シ海邊ノ山脚ヨリ出テ池トナリ  
一里ノ程小キ石山ニ添テ流レテ海ニ入ソノ  
深サ四尺余廣サ二丈余又沸騰シテ夥シク鳴

響クアリ又聲ヲ揚テ呼レハ濃烟ヲ起シテ三  
四丈モ隔リタル所ハミエサル様ニナルモアリ  
温泉ノ水面ニ黒キモノ、浮タルアリ手ニツ  
ケハ洗テモオチカタシ地震海嘯ハ度アリ火  
山ノ邊ハワケテ強キトナリ氣候ハ一年ノ内  
八箇月ハ冬ナリ南ノ方ハ常雪ノ深サ大挺一  
丈ニ尺北ハ卻テ雪ナシ夏ノ氣候ハ甚短シ故  
ニ五穀ヲ生セズ但、子トテルホルトカムシカ  
ツトカハ畑ヲ作ルナリ雷ハ至テ稀ナリ風浪

ハ常ニアレテ冷シキナリ塩ト鉄トハ夕ヘテ  
ナキ故甚高價ナリ土人皮革及魚獵ニテ大ニ  
富ヲ致スモノアリ元來カムシカツトカハ蒙  
古ヨリ衆ヲ植シ地ナリ黒龍江ノ邊ヨリ衆ヲ  
移シタルナリ人甚長大ナラズ色ハ赤黒  
ク髪ノ色黒シテ直ク面闊ク鼻尖リ目深眉ウ  
スシ垂腹廣肩手脚瘦タリ三十沿海ノ處ニ佳  
ムソノ飲食極テ穢シ茶タル狗ノ物クヒタル  
器ヲソノメ、拭清ムル丁モセズシテ用ルナリ

リ居所ハ土ヲ四五尺掘テソノ上ニ柱ヲ四本  
タテ屋根ヲ造リ土或ハ草ニテ覆フ上ニ四角  
ナル穴ヲ穿テ烟出シ明リトル出入口ニ兼用  
ルナリ打魚狩獵ヲ以テ業トス衣服ハ獸皮ヲ  
用テ家具ハ石又ハ鯨骨獸角ヲ以テ木ヲ彫リ  
クホソ<sup>鉢</sup>皿ノ如クニシテ用ルナリ魯西亜ヨ  
リ來ル外ハ金銀ノ類ニケルナリモナキナリ犬  
ヲ多ク又シナヒテ旅行ノ時聖車ヲヒカスル  
ナリ妻ハイツレモ二人三人ツ、モツナリ窓

夫奸通ハ常ノ事ニ成タル風俗ナリモシ<sup>變生</sup>  
スレハ必ソノ一ヲ殺ス以前ハ土人甚野鄙愚  
陋ナリシカ本國ニ服從シテヨリ後千七百四  
十一年<sup>寛保元年</sup>ニ女帝ノ命ニテ追々ニ天教ノ會  
士等ヲ遣シ土人ヲ教導セシムルニヨリテ日  
々月々教化モ行ヘ道理モヒラケタルハ遠方  
テス有道善良ノ民トナルベキナリ又一種ノ  
夷人アリ「アリル」ト云カムシカツト力<sup>南</sup>  
岸近傍ノ島々ニ住ム但「カムシカツト力」ノ人



物ニ同シタリノ總身ニ毛ヲ生スルヲ異ト  
ス女子ハ唇ヲ黒シ男ハ只唇ハ真中ハカリヲ  
黒クスル男女トモニ耳ニ銀鑲ヲカケ肘ヨリ  
腕マテノ間ニ種々ノ模様ヲ入墨スルナリ衣  
服ト居所トハ一カムシカワトカニ同シ飲食ニ  
ハ却テキレイナリ方ナリ魚肉及海獸肉ヲ食  
物トス姦夫ヲハキビシク罪ニ行フ祭所ノ神  
ヲトイフエウルト云是ヲ祭ルニ木ヲウスク  
ツリヨリカケテ幣ノ如クシ蝦夷ニテトイフ歌ヲ

殺シ皮ヲトリテ備ヘ祭ル肉ヲ食用ニス人死  
スルハ冬ハ雪中ニ埋メ夏ハ土中ニ葬ル  
按右ハ地理并風俗ノ畧説ナリ文中ニカム  
シカワトカニハ蒙古ヨリ衆ヲ植シ地ナリト  
云カ如キハ余所見スニコレヲ編中ニ著  
ス然レモリノ真ニ然ルヤ否ハシルベカラ  
ス更ニ後攷ヲ俟ツノト  
魯西亜ノ此地ヲ得タルハ千六百九十八年  
十一月アタテソウレ一軍ヲ帥ヒゴロサツケニユ

カゲリ及「ユレトキヨリ」ノ地到リ土人ヲ大  
早服従セシメテ千七百年元祿三年七月本國  
帰ルリノ得ル処「サベ」ノ皮三千二百張「ベ  
「ル」ラツコナル 七十七獺四灰白色ノ狐皮十  
張赤狐九十一ヲ帝ニ獻シ自得ル処「サベ」ノ皮  
四百張ナリ其後千七百十五年延徳再ビ軍勢  
ヲ起シ「ベ」ニシイヌコイノ海灣ヨリ「ガムシカ  
ツトカ」ニ渡リソノ地ハ勿論近傍ノ諸島ニテ  
討逐ヘタリ然ルニ千七百三十年享保十年至  
六年

人魯西亜ニ叛ヒテ敵對セシカ程十久靜謐ニ  
ナリテ今ニ至ルニテ無事ニ治リタルナリ賦  
税ハ年毎ニ人別ニ「サベ」ノ「ベ」ノ狐右三品  
ノ内何ニテモ皮一枚ツ、ヲ出スナリ

按コレ併有ノ略説ナリコレヨリノ前一千  
六百四十二年慶安四年加模西葛杜加ノ地ヲ復  
探スルノ説アリ「註」コレヨリノ前元  
文二年ニ當テ魯西亜國臣會議シテ北西墨  
利加ヨリ日本及支那ニ至ルニテヲ巡察ニ

テ諸外国ノ交易ヲ開ニトテ大船ヲ築シテ  
東洋ヲ窺伺セシムルノ説及リノ商船「カム  
スカ」ノ南ニ在ル「クルリ」ト云島ニ至ル由ヲ  
本國ナル船司へ告ルノ文載セタリ既見于  
魯西臣  
紀然レ氏前人ノ述既ニユレヲ詳載スル可  
以テコトニ贅セズ

此地「魯西臣」ノ小城五座アリ一ヲ「ホルス」ケ  
レツコイト云「ホルス」カヤト云大河ノ側ニ  
リ「バシ」シンスカヤノ海湾ヲ去ルト三十三ウ

ルステニ一ウルステニ三城ノ大并四方四十  
九丈「オコツ」コイ通南ノ船先ツコノ地ニ集  
ル故ニ甚繁盛ナルトナリニオ「キ」プルホルト  
カムシカワトカト云五ヶ所ノ内ユノ城最古  
シ「カムシ」カワトカ「河源」ヲ去ルト六十九ウ  
ルステニ「ホルス」ケレツコイノ北ニ百四十二ウ  
テ「ホルト」カムシカワトカト云「オ」ツプルホ  
ルトノ口口三百九十里ニ木柵ヲ構フ四ヲハ

ワツカト云千七百四十年ニ玩教建ツマワツ  
カ河ノ港上ニアリ五斗千ギルト云近頃建々  
ル城ナリ千ギル河近ニ在リユノ地ノ属島極  
テ多シ著シキモノヲ左ニ挙ク

按ニ以上城柵ノ略説ナリ北狄ニ在テ城ト  
称スルモノ多クハ木柵ナリタシ加模面  
葛杜加ニ在テハ穴<sup>以下</sup>居ノ由<sup>解</sup>ナレハ城ト称ス  
ルモ古地中ニ構ヘシトコロナレハ  
クシリル諸島ハカムシカツトカノ南岸ニ起リ

西南ノ方ニ連綿トシテ散在ス著敷モノ二十  
五島ノノ鎖ニタルモノ教ヲシラカハカムシカ  
ワトカニ附近ノ島ニハ本國ニ隨ヒトモ遠ク  
ハナレタル島ニハ各ノノ酋長ヲツテ治ム  
ルトミエルナリノ地ニ震多ク又火山アリ  
日本ト交易ヲ専ラニス又日本ノ近傍ノ島ニ  
ニ一種ノ毒藥ヲ生ス御附<sup>也</sup>ノ根大ナ大葉ノ  
如ク色黄ニシテ<sup>け</sup>泊夫藍ノ如シ天ニヌリテ獸  
斗毒久又エタルベ<sup>レ</sup>ユルプノ島々ニテ<sup>レ</sup>アラニ

ド子ツテ止レバナリ以テ布ヲ織日本ノ木棉鐵  
器ト交易ス又一犬島アリソノ南ノ端ヲ松前  
ト云往古ヨリ

日本國ヨリ城郭ヲタテ君長ヲ置玉フ又「カム  
シカツトカ」ヨリノ海路ニ「クナシリ」島アリユ  
ル「以下ノ三島ヲ日本ニテハ總テ「五ツトイ  
フ」

按右屬島ノ説ニ係ル「クナシリ」諸島即我「古  
「カ」諸島ヲ称号スルトコトナリ「カ」諸

島ハ我ニ在テ古ヨリ称スル「千島」蝦夷是  
ナリ彼「ユ」ヲ加摸西葛杜如ノ屬島トス  
レリノ諸島中間ニ在テ彼此何レノ屬ト言  
ガタカルベキ所ナリトイハレ蝦夷ハ毛人  
ナリ毛人所住ノ地ニテ我羈縻屬國タルニ  
疑ナシタミ彼先ツ「ユ」ニ事アツテ政治ヲ  
施スヲ以言フナスガ如キハ何ニヨリテコ  
レヲ辨斥スベキ「クナシリ」大ニ可恨ノ甚  
ナリ右止白黒也及「カム」ナカ「略説」ハ蘭人

ハレニテイニカ著書ニ所見スル魯西亞併  
有ノ説ヲ中野柳園譯スルトコロノモノヲ以  
テコ、ニ収入シ合ノアカエリ考一篇ヲ十  
スコレ以テクノ國地ノ大概ヲ窺識スルニ  
足レハナリソノ詳ナルハスベテコ、ニ  
録出セタル別ニ全志ノ述ハルヲ以テ十  
...

松前志 源廣長

北狄異方歐邏巴東北州境莫斯哥未亞是昔

都ナリ今ハペレホー 屈國葛模失葛費閨夷人云カハシヤフ

カ島是 其度數素ヨリ知ヘカラス 或云其地五十六度ヲ

越タリト總名ヲ亞魯齊亞ト云フ蠻人ヲロスコト云

こヨシ其南海開帆ノ海ロシオホツカト云フ北風ニテ

我東北ノ夷地ニ至ル其水行凡二百有余里ト云ヘシ

其國多寒粟麥アリ皮革アリ人多カ長大鼻

峯峻高服飾器財悉ク和蘭ニ同シ火術ヲ善ス



重寶ノ紋印以上五ツナリ四隅ニ年数ノ字アリ  
縁國字廻レリ

按ズルニ此錢疑ラクハギリユス國ノ錢也「ギリユス」國ハ

東西凡四十五度ヨリ八十一度南北四十六度

ヨリ七十度ニ至ルノ地ナリ「エウロツバ」ノ東ヨリ

「アジア」ノ西ニ跨リテ北ソ方「スウエド」及ビ「氷海

ヲ承ケ南ノ方「タルタン」及ビ「トルコ」ト大ニ戰テ北高

海ヨリ黑海ニ添テ「アソフ」ノ「ピュルトワ」ノ諸城及ビ

「キリミセタルタン」ノ地ニ至ル一テ皆陷シ入レ尙又東ノ

方「アジア」州中モ沙漠ヨリ北方海ニ添テ「カムサスカ」

「カムサスカ」ハ蝦夷ノ東北ニ至ルニテ皆其屬國トナレリ故

ニ今ハ世界第一ノ帝國トス其地方廣大ナルトハ大清

トイヘ氏及「ナシ」其帝都ヲ「ムスコビヤ」ト云「リ」則チ

「エウロツバ」州中ノ東極ニシテ其國ノ中央ニアリ北方ノ

寒國ニテ諸物ヨク産スト云フ「非」氏強大ナルガ故ニ

其屬國ヨリ諸物ヲ産シテ國最モ豊饒也



嘆詠餘話

享和元年辛酉のとし 肥前のおとろに下長南橋  
地洞といふおとろに帆也ー 幸合船を被渡看何し  
と其後送るおとろに必味何し 的復あのおとろ  
本其もいふおとろに法合し 以男解る諸事  
おとろに無へし若もいふおとろに方きの書上といふ  
地右おとろの由を何はかくといれ 通すおとろに  
手関はといふおとろにしおとろにまふおとろに  
おとろに由近頃を傳説をいふり 手地右おとろに

しと法りしもの次第に書かれざるを後述の如く  
書き付けを以て写し送るありし宗初の書上より  
「水島に曰くボルネオにリユコリアムと云ふ島あり  
そは其後より言傳の内にリユコリアムと云ふ島あり  
南儀何れは洋中より來去し又一通にボルネオ  
と云ふ島ありとあり若し右呂宋島のリュソン島に  
そは火の島と云ふこれ其後より傳しあり其島は  
の仕廻りを知りずと云ふし其島に不害せしむる  
櫻はリユコリアム一名リユソン又西の島の人名にて「三」

と云ふこれ其島に板地海軍國皆是を載す唐  
の人のリユソンと云ふ島を音を傳めし之我  
邦に傳へて其島を呂宋の字を傳れし之呂宋は  
廣東の南の洋の海中に在るの大嶼之國なりボル  
ネオ 唐山も此嶼に音傳し其地を以て 嶼中子属を以  
て何れは嶼に呂宋といふ島あり其地の名は唐  
書の諸書に在り其地を以て嶼中と云ふ者ありし  
相此呂宋は我元寇二年の頃より西者伊斯把依  
西島侯有し其領地を以て此島を以て天子



右右地ゆく中務一これとさけたる  
屋一おまじアカワといふ地も右どふ  
振して水禁心の前ありぬり是亦去  
名もゆゑ一て水吐味六を交とそ阿媽  
港噴神は廣末香山線り層ある一語  
して西赤波ル杜瓦ル所候とあり  
そ本女の人交代して永住をいふこ  
れ侍新把依重と接壤セ教同教同  
宗の比しく天正五年のにあり同しく

我 邦り来りて宗向を強めしと  
ゆふよけはもたたり一歳に挑作しあひ  
渡来と禁ふとしたり之をば耶羅地  
禍ありしより後徳意の船渡来と禁  
止候とされしとありて中

長崎志云長正庚子 西暦1600年  
泉別堀の浦大船一艘来律やり仍る  
去客子と尋なり阿崇地人よ諸尼  
利重人為交易致すよと渡来也

由所より仰に命を賜ふに是に去船に府と  
 一の事過りの由事あり後より彼船南  
 海と云ふ廻りし事別御る難風も過り  
 相州浦賀人亦事也破船すけ方云上  
 之別船中一人數陸海ありて名氏も出  
 俣渡即懐より江府表に上上以依り  
 妻如出遂に冷後処彼國に去りて其日女  
 渡海高買仕意方出死し了達  
 上舟航し通出免出 仰出船より一の令

歸ふ事松崎に江府小人丸舟の片滞  
 留せりし事るに接待が長屋安下  
 意れ付し 管中にお呼れあふ筋  
 のゆきも内尋りし事ぬれ長屋  
 ぬきも内尋りし事ぬれ長屋  
 ヤヨスガシ 諸尼利西人アンニ指たる前と  
 アンジ町といひり 所よは加比丹の事一も長屋  
 の内八代例は長屋ハヤンヨウス  
 の長屋の事一も長屋  
 の長屋の事一も長屋  
 長崎雜記云 阿蒙港人 諸尼利西人 案



慶長十四年七月廿五日

津朱

印

千ヤクスクルウニヘイ千

諸尼利西んちるれーも 同格ありー同  
十七年らる多イキリスや平戸に來り至  
易す引續きこゝ多し渡來せーしあ  
易利潤おさゝ空に及え和七年あり辭し  
て未ふしと阿葉陀を多し渡來せ

元正寛永十八年よりハ濤に今の長  
崎の福よりしとあり出崎といふあり  
高館をあらさゝあり船と來りしと於今  
百有餘年け阿葉陀乃み連綿たり  
傳えゆき頃ヤニヨウスと中加比丹あり  
我 邦に忠義乃事やと我船多し  
渡海洋中出制林心の黒形見をーしと  
あり時を速み海を中と下し又諸島  
礼の異説お承れし一年と告訴し

唐子等也約束中より一々ありは事  
物もや於今年一入津の即刻風説  
書といふものごと指しと事一恒例あり  
とそ二る年りくの通りして最初乃  
ち中合のお遠あくばぬのそ我 邦人  
對しとあり異議何の事とやあれを以  
來と去人との説話のありを持渡の  
書ふありしてそ過世界美玉の治乱興  
敗風俗事情を知らぬものなり  
等ありととととととと 國初ありは事  
み渡海を許しと海に江戸お船献上  
お願おは 作付と旅ありととととと  
亦おとり渡來を許ありと他の諸公  
えおととととととととととととと  
ゆありあり是近外國の是もああり  
ととととととととととととととととと  
魯西垂ありと我東に越夷の真つ地盤  
食のつととととととととととととと  
頃とととととととととととととととと



ウイルムヘー十といふ者耳おせしむ  
ありとぞり

かくの次弟も異國なるるる唐阿蒙院  
の海ハ乃津法度とあり前より下  
如多耶之穩宗の福ありしるる呂宋阿  
媽港ハ固より諸蕃の来津以てし  
林止のるるを論諸國とも  
異國船見ありし人あはし味を處  
るるをゆりし依し異船乃津を我

諸州の人異國に漂著る者唐船が  
獲送し来るるありてハ邪宗乃と  
えりるらりけて呂宋阿媽港より漂  
到せしるるありしと細味し又た  
あし各國船見ゆハハ之類族の異  
船来著るるハありしと深し味を  
遂に終るるしとゆふこれ海事と  
みま味味の伊よあし水事とこれ  
信しむありしと見ゆありしは是



もの仕癖仕来りと思ふらるる之も或ハ  
心持遠のひらきありんとも昔も其  
思ひも事多しつりて水も思ふ  
み漸浸たる大洋を船海する船先  
を擇んで漂着する處を極むるも又其禁  
止の國ありて各國の船日本地へ  
漂流するも極むるも又申は彼  
心ありて来はるも其の何れも  
是も何れも能く其れに從ふたる  
あり行きたるありり明白も云上あり  
しゆ惟しきハ何や形の水仕立も  
あり極し又其ちの極ありしりして  
も其宗師の依り極ありしりして  
委し其事由も尋ね索り今の彼  
古の風俗もいりて其れたるも  
又其國船ありて来りて其れを助の  
其地も勿論其宗の船にてありても  
何の子細ありて来洋又いりて漂

著といひしも詳しし問一し其模倣が  
如何様にも取扱ふるも一し其  
はとの漂船来船おきあはし  
の名ゆへに去土人お系組あふり如き八  
以て之を以て留多々あるに國名をりり  
たるもりあるを一し唯其怪を模倣ふ  
まふたやしく出味地の人といふを  
事是もて傳ゆせし記一二ありこ  
れも近きありの事あり  
寛政六年甲寅仙臺乃本船安南の  
地の漂著一し同七年乙卯安南より  
候船を以て去四月阿媽港に送られ  
七月阿媽港より廣東あり同処あるを  
厚きと取扱て獲送の官人附添を捕  
送唐國あり長崎迄の番船おきあは  
し朝也一し事ありは其の書あり

去經歴せし阿媽港と臨して唐山  
及西洋とありし名を認め出せりを護  
送の旨浦船を漂人おの船中を傳す  
長崎にありしハ必し是阿媽港にあり  
やといふ事ハ口罕しき事ありし地名中出  
てハそこに我れ味ふを安め守るを  
難念及り困窮あり我れハ帆をおそ  
るの迷或つたりとくれし告示せし  
唐人止むは心得あり吾れは子之依

始終アガカト云事ハ中出するに經歴乃  
諸島の目なるとしたる西洋ありし名  
よく事海をたりし漂客實に阿媽港  
とアラウと云事ハ未だりしは是れ  
澳の澳中の唐客と云々也を唐人ハ  
と云やしは是れ未だりし右マカ  
漂客と云の是れ扱ふに人情あるを  
おぼりしあり固より水はけりこの人  
初より柳の傍に居りし中宗

解を勤めしる事あり  
廣東の來りし巡檢の人を助られし  
廣東の事ありし絶て懐し事ハ  
なすおむ事ありし物にむアカハの名何  
わよ中出くハ此味ハ安とて掩ひか  
さしめたりし又去後

寛政七年乙卯津輕者森湊の船南  
海邊の漂流し生残りし船頭未進し廣  
東に倭船し例乃めく同取らる護送を

得て因十一年己未台浦に倭船なる者  
流し歸朝せしこと此も前例の如く乃  
死扱て廣東に漂着者の積り西國取  
らる事漸く送り居られしハ此味を  
事に海しとて物々其實を市制禁の呂  
宗阿媽港の諸島を録歴せし之最初  
の南海中しハヤと云ふ山を漂流者  
夫よりバタシカヤン杯ハ取られしつ  
かよマ子ラと云ふ大島を漂流し居られり

はマ子ラハ即呂宋あり其地別名の義ハ  
前よりありぬは島より日者人ときそそ  
誠の無状の元振の苦しそそ津路の  
舟子固あるを敵と知しむいりてし  
地々々々々々その情あり事と思ひ  
しそそ漸に船ぞと出帆せしよ  
又マカヲと云処のありこれ所謂阿媽  
港之是亦りお人々出て来よとり合  
はす飢渴の及ぬるに次ぎ之あり

廣東は比々多るるに手筋出来て彼地  
り著るに右件々の振るに無滞の响鈴ハ  
セし之をもしめよぬく清高も七海  
乃小吏半半義甚初ありは兩地乃各其  
いさぬ振て振て振て廣東に深著る也  
しそそ事跡しそそ少りしは  
の事是まて前後幾度も何の事  
たし之敵ありとても茫洋たる海  
乃舟子枯死地ありとていし何

新にも論せしやう宗門の依り有る事  
此の味の本事八國なる事ありたるありし  
しあしとありし事とこれまたの事あり  
りふか海流の事幸も却て又ありし事あり  
きたる事ありし彼地地の形録と  
人情風俗もまたありし海程方位  
またも委しき事ありしと  
たきしことし

今より六十年前元文四年己未秋

五

東北海より南海へ走り奥州及房州  
乃沖江異ふ船帆影見し且上陸し  
各名も多かりたり異船を金く魚目  
亜人通船乃始とすし其後明和八年  
辛卯阿波の島に漂着琉球大嶋元  
之島ありし船も魯西亜ありし系組ハシ  
コトトシりしものも亦何れ他ふとも  
少由又寛政四年壬子紀州熊野浦に  
来りし堅治力と名ありし来りし船



舟中よりふりて考ふれば諸厄利亞  
 必と名由み内八年丙辰松前地は東  
 津して物人交一人乗船しぬり六全  
 諸厄利亞船と申出ツ又近頃と諸東  
 津のアリカ船と稱するものみべがらボ  
 ストシ船を々々稱して去實る皆欲する  
 各所りて通船来津してあると伺ふ  
 ものありけり其知るべし其れを々々異つ  
 邦外域諸島の事情と知りぬの船の

横船舟中乃形おとけて能く熟識せ  
 る事問ひすとも味くあはれと毎々  
 く又此問ももも孫の彼と知りて吟味  
 有りある事思ひ白とゆへにある事  
 なる唐と覺く唐人と覺く異つる事  
 唐船くとの事心以評判する事ありて  
 吟味ある事ある事容易に分明とゆ  
 へ事之ある事ありり海島諸島の地理  
 八時よりありと思ふは是れよりてお

ゆふの阿葉院より前文乃次弟にて交易  
渡海乃事そ昔彼なるも利と取ありも  
免許しゆふと六永久出子よつけられ  
彼も利をとりて右なるも右なるの松  
子出てもゆふと用と年とゆふとゆふと  
事一大あるの事ゆふとゆふとゆふと  
文けし我なるも阿葉院ゆふとゆふと  
ゆふとゆふとの松子ゆふとゆふとゆふと  
ゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと

神祖乃由深き事遠大なりゆふとゆふと  
彼と呼せゆふとゆふと異國の目ありとゆふと  
の思ふとゆふとゆふと己年と諸なるも戦争  
各々の思ふ成る事ゆふとゆふとゆふとゆふと  
且彼なるも板せゆふとゆふとゆふとゆふと  
學の徳書ゆふと世界地球精細の圖説も  
夥多持渡りゆふとゆふとゆふと和解ゆふとゆふと  
道もゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと  
亦對説話のゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと

後書籍の上とて上虚飾をある事  
ありありて後書籍よりして徳異邦の  
事々々委しく其寧情を究め委れ  
たす事々我 邦古来より其を  
事用よりある事々の通語をある但是  
ましく漢古の説を傳く受て其地は  
乃徳ある事々の無識より事々を求めず  
唯中國のあり四夷八音を賤めあるの  
不ありて其是事々の無少あり及はる事々の

右

國戸西較多のありの内獵狩とも大戎也  
猿とも輕蔑する人倫乃及する事々の  
さる夷賊多しと聞ゆれとも悉皆種  
屬乃亦書表する見へす五倫五常の道  
自々備り能く其國天下を治め徳徳  
古易しくも殊々事々西歐邏巴洲の如く玉家  
刑政乃礼樂文物の成るる天文地理曆術  
医算し数諸伎藝の微々も測る事々の益  
西圖器用の如く其機智精巧東方

諸玉の命て及ふおつりたるものあり己  
昔一なる我 邦も傳来して玉皇の成  
のなる築城の削度火術銃砲と初めと  
して千里鏡自鳴鐘乃徳器便法と  
そ古倍思と致せる精鏡ありを推する  
想一送る自玉皇の功を言へ何そ  
彼も假しくけりぬや 玄良術伝説の類  
を擇む 我も成るる何もの始りぬや  
然るに玉皇と接し擇んで論せしむ

古

昔玉皇の傳来するをいふ事ありと  
我も思ふにあ又

御國法てあふの事深くわく知せぬ  
事ある傳りぬと 皆由あり異形来著の  
事ありくも免角人口と開ちぬと控へ見ぬ  
是も何もの弁あり 愚倍ふとけぬと 觸  
評説騒々ありと止め何の事趣意してたつる  
事ありと 然る我  
邦も殊々四面海ありぬと 玉皇の存る大

常の四方あまの方位古倍乃事一通り  
吾知トの事なる事常典なる事唯  
て我宗名改め乃歳あま心違中物  
事ある事以の事なる事宗以る事  
禁中吟味嚴密ある事按し事甚く  
事あり近頃魚の事ある事兼る事  
情と知りたまはる事是と扱ひあ  
行遠る事したる事是と避ん  
事と以て視る事するハ福と招  
の事

孝

此片の清朝の理藩院と云ふ公衙と建て  
諸あまの事と取扱ふ事ありと  
は局と各種の事と講習せしめ彼  
奉る表文書簡と云ふ事と譯文  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
字と写して云ふ傍り譯文と添下  
書と見たる事何れ云異字既初  
り写せる事何れ云書解と云  
也右様子見由右様の局と我

假

邦も建てあひ異ふの事と豫め吟味せ  
めそれらの取扱は後叙するまじむる扱  
ありあひ常の如國の事と知るとは家  
一政要事とありあひん事も然んとして  
とも吾不慮と待つたの事と清土の如  
他國の徳徳をあるに不用の事と  
これとあふあふの徳未あるに當或の  
ありとせばれを之に相阿榮陀を我  
邦より通商するもの二百有餘年を

乃倍と宛ふもの地を僅七州あり  
横ありといは古来四方万国に徳未  
一と吾人智をやく関けを其學術交  
他の諸大邦も勝つとも劣りなせる事と  
見ると吾識を吾人述する所は諸國に  
群藉悉皆窮理精詳の思説あると見  
て知らるるは然れは幸なりけむの扱り他  
乃異邦の事ともさす一と吾人ハ尤も策  
あり下既當分其異域乃りとも出

吟味也詠議の端とある等 和系物未  
の書籍の譯説地海全圖あり依りて明  
決定し即ち事多しなりあもや略す  
要用の書冊を有未く通詞も初め  
そと當る公用の透しりきく彼要書を  
和鮮せしめ又

徳廟の成仁澤よしと蘭學の創草あり昔  
志木昆陽の修教し今も関あり東より  
書しと鮮しとの送茂関けたれ異域

對邦の地理の説と天文或天文医算或  
は彼地方の多陸軍法兵學或は火術砲  
器の要術用法或は軍艦戎器の製造或  
は圖及測量の良便ある諸法あり  
翻記ありあもや事多しなり  
にして異域乃要術とゆふ也 但我用は  
施すの所捨を隨意ある事之是皆古  
未見なりたる和漢の書の出しなり  
み多しあもや事多しなり一は水之唯

通事の毎戸して其の如くあるを以て其の  
と撰ひて其の如く撰舉するを以て其の  
人と以て各自の配當し是を勢や其  
漸く其の如くあるを以て一説と成りし  
一事の用と為し一書の記と成就せし  
一方の釋と爲るなり 本邦回来事  
闕するも良役の方策するに如く又その  
り上の一新術一良法を加へ増んし必なり  
是れ彼等の書空しく説くを以て説くは

既り以て其の清和の初めより天文暦  
術の書漸く其の譯成りて西洋新法暦  
書曆算并其の書と初めりて律曆淵源  
の大改まるる曆象考成後編の如く古  
今と云ふ所實測の記説とあり今時西  
洋法より改暦するも實詰の正法あり  
を以て清和の如く成りし右譯説とあり  
多しと云ふなり又條後其の彼を以て精  
を以て其の如く書冊其の如く官本



とありて新記とあるんを以て其のあり  
其のありは是れが漢書に於ては漢書  
記説の上に出る精理乃妙説我邦は  
興る也一は條地理の世に係るる乃  
事は漢書に僅に職方外記利氏輿地  
圖説乃約説ありの事あり知る我あるを  
幸に以て學近の時居るを以てその  
出る輿地詳説の精細ありとの十餘  
卷を著し出れ和蘭の通路ありとの事

域

此のありは邦四洲方の事ありて  
其漢人乃其の空にありの事ありて  
其のありは一事ありて其邦異域と  
るの二益ありたり其家の一ありと  
之れありて其地む備要法移るの良  
術の類も新記出るるの實用あり  
んをわくしむる也一但るれと為れ  
く其古人物と考説して其れと信  
るに在る也一何とあるに近來世の

後の使事の形跡あるを以て徒ら人の  
奪り術と御所の機と一ありよこれと  
説く去る味と求めしめて寧ろ世子の妨  
とあり人或る是と怪むといふ振の事  
ありむるのありきこみゆゆにけり  
乃者を除く名多しとあり小是と唱ふる  
ものごと林ふし一篤好精思必しと事と  
海ふあふし人才と撰舉し一けし世子と死く  
思ふしゆ件し論もろり如きの要説と完ふ  
うはふ家の大益あるを以て彼為林ふと後  
事あり形宗の味諒ふの事も分明  
とゆくとたふ去る名と世中紛し一能  
能ふとと海と一時の臭と掩ふといふ物  
ある仕病も必しやむとありては上下  
去る寧ろ事と分曉するものとゆきなり  
頃口時流の寒形なり冒るれ皆病ふ方麻  
みまし一うち常ふ心の思ふ事と長夜の  
燈下ふあふちしり前修錯礼堂後鄭

言ふも来く、鑑写の暇あつくと穴居  
他見も屋きりののふあつて、丁卯の晩秋  
秋月のまゝありたり

言ふも来く、鑑写の暇あつくと穴居  
他見も屋きりののふあつて、丁卯の晩秋  
秋月のまゝありたり

